

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

突入せよ！『あさま山荘』事件

2002 (平成14) 年5月19日鑑賞

Data

監督・脚本：原田真人

出演：役所広司／宇崎竜童／天海祐
希／伊武雅刀／藤田まこと

👁️👁️ みどころ

今から30年前の1972年2月。長野県のあさま山荘事件は、私もテレビに釘づけになった。佐々淳行氏の自叙伝ともいえるこの事件が今よみがえる。果たして今の若者はこれをどう見るのだろうか。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<「あの事件」から30年・・・>

1972年2月28日午前10時。あさま山荘に人質とともにたてこもる連合赤軍に対して人質救出作戦が開始された。

今からちょうど30年前だ。

その作戦を現場で陣頭指揮したのが当時警察庁警備局付監察官であり、この映画の原作となったノンフィクション「連合赤軍『あさま山荘』事件」の著者、そしてテレビなどで顔なじみの佐々淳行氏だ。

そしてこの佐々淳行を演ずるのは役所広司。

前評判は華々しく、東京銀座で行われた5月10日の試写会には600人の招待者が集まり、上映に先立って佐々氏の講演が行われたことが大きく新聞報道された。また佐々氏と共にこの映画を観た小泉総理は、映画に描かれた当時の警察内部での「各種綱引き」の苦労と、現在の「小泉改革VS抵抗勢力」の苦労を対比させながら涙ぐんだと報道された。

佐々氏は、「人質は必ず生きて救出せよ」「犯人は全員生け捕りにせよ」「銃器の使用は警察庁許可事項」という当時の後藤藤田正晴警察庁長官（藤田まことがいい味を出して演じている）からの厳命を受けて、東大の安田講堂攻防戦と同じ、催涙ガスと放水と大盾という三点セットだけで連合赤軍の銃の乱射に対抗し、警察官個人の勇気と肉弾戦によって犯人

を生け捕った苦労を実に生々しく語っている。

その講演のサブタイトルは、「今なぜ『あさま山荘』か」「男が男であった時代の物語」とカッコいい。

<佐々淳行氏を演じる役所広司という役者>

2001年度のアカデミー賞作品賞は、私の予想どおり『ビューティフルマインド』が獲得したが、この作品を名作とさせ涙を流させたのは、脚本の出来もさることながら、名優ラッセル・クロウの演技による部分が多い。演技のうまい役者さんが、精神を病んだ天才数学家の苦悩を描くというおあつらえむきの役づくりに没頭し、それを演じ切れば、すばらしい作品になるのはある意味ではあたり前だろう。

これと同じように、今や日本の男優の中で演技派No.1といっても過言ではない役所広司が主役となって、あさま山荘突入における警察官佐々淳行氏の苦悩を演じれば、それなりに見どころのある佐々淳行像を観せてくれるのは当然だろう。

そういう意味では、「銃器を使ってはならない」という重大な制約や東京の警視庁と長野県警との連携の悪さ等数多くのハンディキャップの下で人質救出作戦の第一線を指揮する苦労を、役所広司はユーモアをまじえながらみごとに演じている。

また当然ながら、原田真人監督の全体構成のうまさもある。すなわち、事件発生のプロローグをさらりと見せ、続いて後藤田長官から佐々氏（役所広司）がかつぎ出されて長野県警と協力して人質救出作戦の体制固めをする苦労を描き、そして最後にハイライトの人質救出作戦の展開をそつなくまとめているため、十分に見ごたえはある。

<不完全燃焼・・・消化不良・・・何か物足りない・・・>

しかし私にしてみれば、観終わってみると、何となく物足りない。その不満は何かというと、この映画があまりにも警察サイドから見た人質救出作戦の準備とその決行、そして警察官の犠牲を重ねながらの人質救出成功というストーリー—辺倒で、それ以外のものを何も描いていないということだ。

連合赤軍は一体何を主張し、何を求めたのか？

そして彼らはなぜ、あさま山荘にたてこもったのか？

また何よりも、1972年という年はどういう時代の流れの中のどこに位置していたのか？

それらのことに全く触れられていない。

したがって、明確な時代設定や時代状況の説明もなく、また「敵」である連合赤軍が河者であるのかもこの映画の観客には全く知らされないまま、ただ困難な状況下、人質救出に向かう警察集団の姿だけを追う結果になってしまっている。多分、原田監督はその一点にしぼってこの映画を製作したのだと思うが、私はどうもこの姿勢には納得できない。

佐々淳行氏の原作が、警察官の目からみたあさま山荘事件であることは当然だが、映画は必ずしもそれに忠実に従う必要はなかったのではないかと、と思わざるを得ない。

<団塊の世代からの問題提起の責任は・・・？>

偶然だろうが、この「突入せよ！『あさま山荘』事件」の公開に先立って、昨年12月公開された高橋伴明監督の「光の雨」が、今各地で上映され、反響を呼んでいる（平成14年5月25日付 産経新聞）。

「光の雨」は同じ連合赤軍、あさま山荘事件をテーマとしたものだが、当時「総括」と言われ恐れられた連合赤軍の活動家同士のリンチ殺人が描かれている。高橋伴明監督は53歳で私と同じ歳だ。高橋伴明監督自身も学生運動に深くかかわった体験をもち、自分たちの体験を次の世代に伝えていくべき必要性を説き、「それが十分できなかったことが、今の社会がいびつになった一つの原因だ」と述べている。

私も全く同感だ。団塊の世代と言われる私たちも既に50歳をこえ、今はその息子や娘たちが学生生活と青春を謳歌しているが、果たしてその世代継承はうまく行ったのだろうか？

30年前のあさま山荘事件を考えるならば、その人質救出作戦を単なる「チャンバラ劇」や「ドンパチ合戦」の対象として見るのではなく、「価値の対立」の一つの極限状態のあらわれとして理解する必要があるし、あさま山荘事件をテーマとした映画は、それを議論するための視点を提供しなければならぬのではないかと、私はそう考えている。

そしてそう考えた時、この「突入せよ！『あさま山荘』事件」という映画は、警察官の目からしかあさま山荘事件を描いていない、不完全燃焼の映画だと言わざるを得ない。この映画についてのこの私の評論については、是非読者の御意見をお聞きしたいものだ。

2002年（平成14）年5月31日記